

香爐會

て問けるに、さる事に侍る。此歌は仲麿もろこしにて月を見て讀ける由古今集にか侍りし、されば歌は我やまとの風なれ共、唐土にて讀しかば、唐物にこそ侍れといひしかば、水鏡にも仲麿唐土にて、三笠の山にいでし月かもと讀し事見えたり、誠に物がたき文字の懸物ならば、異やう過なんをおもしろくこそ侍るとて、客も共に感じけるとかや、茶會を斯風流にして、文雅ならんこそをかしく侍らんを、田舎の茶會はおごれるのみにして、年老ひ物むづかしげにふとり過たるもの、萬づ自慢したる客のかほにくげにおもひやり、異なる事なき有さまのどちいと愚かなる物語などして、物食ひ茶す、りて長居したる、心づきなく見苦し。

〔老人雜話下〕香爐の茶會と云ことあり、主人炭をなをして後、長盆に香爐と香合と香筋とを置て出す、料理まだしき時是を出して、勝手口の障子をはたとたつる也、其時上客香爐にある香を聞左の袖より懷に入れ、たきとめて右の袖より出し、たきながらを懷中して、次の人へ廻す、次の客、また香合の香を銀盤へつぎ、聞て左の袖より入れて右へ出すこと、初客の如し、末座に至りたき終て、残りたる一爐を香爐に置き、上客勝手口に置き、主人の爲にする也、客五人なれば香五片、六人なれば六片、香合に入るなり、大さは二分四方、厚さは分半也、若し料理間もなく、又は客を試みんと思へば、勝手口の障子を細目にあけて置く、其時は初よりつぎて出たる香ばかりを聞てまはし、勝手口へなをす法也、香爐も必ず青磁のすぐれたるを用るにも、非ず、瀬戸などのこびたるなどよし、心得あるべし。

〔槐記〕享保十四年正月廿四日、香ノ茶ハ、必ず聞香爐ヲ不用口ヨセカ、スベリ口ヲカキアケ灰ニシテ、銀ヲシカズ直ニ燒ナリ、客ヨリハ古キ御香ニ候、ナゾ火布ヲシカレズヤナド、挨拶ス、若シ名香ハ必ず銀ヲシキテ燒ナリ、銀ヲ敷ホドナレバ、亭主チト續ガレ候ヘト云、客固辭スレバ、其通リニシテ入ルガヨロシ、シカレドモ續グベキカト云ヘバ、亭主勝手ヨリ香盆ニ香箸木箸並ニ銀盤ニ